

## 東日本大震災・緊急消防援助隊派遣を終えて



【所属】 寝屋川消防署

【階級】 消防司令

【名前】 荒木 富雄

「お願いします・・・みんなを助けてあげてください！」

これは、被災地で私が被災者の方に掛けられた最初の言葉です。

私に声を掛けてきた方は、着の身着のまま逃げてきたと思われる 30 歳代のお母さんと 5 歳ぐらいの娘さんの親子であり、二人は力強く手をつなぎ、頭を下げ私に悲痛な訴えをしてきました。自分達も被災して大変な状況であるのにも関わらず自分達だけでなく「みんなを」という言葉が、今でも私の心に残っています。テレビなどで被災地の映像を見るたびに、あの時の親子の悲しい訴えが蘇り、あれからあの親子の家族は見つかったのかという思いにかられる日々を今でも過ごしています。

地震発生当日の当直勤務中に、私が所属していた高度救助隊に緊急消防援助隊大阪府隊第 1 次派遣隊として被災地への派遣命令が下され、人命救助という重い任務を受け被災地へ出動しました。

我々第 1 次派遣隊が活動する岩手県は、1300 km 離れた場所に位置し、到着したのは出発から約 30 時間後でした。今まで経験をした事のない大地震災害への緊張と恐怖心によるものか、また、救助隊としての使命感によるものか、私も隊員達も全く疲れを見せる事なく、到着して 1 時間後には活動場所である大槌町へ出発し、不眠不休の闘い（救出活動）が始まりました。

我々第 1 次派遣隊が派遣された岩手県大槌町は、その殆どが壊滅状態であり、まだ誰も救出活動に着手していないエリアのため全く情報が掴むことができず、1 万 5 千人の殆どの住民が行方不明の状態でした。時折大津波警報が発令される極めて危険なエリアであるという支援情報を小隊長である私が受けた瞬間に、「一人でも多くの人を少しでも早く我々の手で救助したい！」という気持ちと「隊員全員が無事に大阪へ帰る！」という気持ちが私自身に覆いかぶさってきました。私がそのことを隊員達に伝達した際、隊員達はかなりの不安と緊張感を隠しきれない面持ちで私の話を聞いて

いましたが、隊員たちの目は、自分達に課せられた使命感でものすごく輝いており、頼もしい隊員達の顔が今も私の目に焼き付いています。

活動場所へは、リヤカーに資器材を積み込み、徒歩で山越えを行い、最後のトンネルを通過した瞬間に目に飛び込んできた光景が、町全体ががれきと化し、殆ど建物が残っていない想像を絶する壊滅状態であり、その状況を見て、私も隊員達も絶句したことを今でもはっきりと覚えています。私自身、阪神淡路大震災やJR福知山線脱線事故にも派遣され、現場経験もそれなりにあるとは思っていましたが、経験のある私でさえ、被災地の状況を目の当たりにし、かなりのショックを受けました。そのため、現場経験の少ない若い隊員は、相当なショックを受けていたと思いますが、救助隊員としてその様な姿を周囲に見せてはいけないという一心で活動していたと思います。

活動中は極めて危険なエリアでの活動や余震のため大津波警報が発令され建物から緊急脱出する危険なシーンも幾度となくありましたが、がれきの中で家族と離ればなれになっていた20数体の御遺体を発見、搬出したところで第1次派遣隊の活動が終了しました。

しかし、我々の活動が終了し、大阪へ帰る時にも、今なお発見されていない多くの人を残したまま大阪へ帰ることは、人として、救助隊員として、とても心が痛み、もう少しでも被災地に残り、もっと多くの人達を助けたいという気持ちでいっぱいでした。

今振り返ってみると、自分達の限界を超え過酷な状況下で誠心誠意活動してくれた隊員達には本当に感謝しています。

今後は、私も隊員達も今回の貴重な経験を活かし、本来の任務であります枚方・寝屋川両市民の安全安心の確保の為に、隊員一同全力で貢献していく所存であります。